

## 第7章 コロコロおはなしの会 ～おかあさんたちの「井戸端会議」をめざして～

はじめに

静岡県富士市は富士山の麓に位置する人口約 24 万人の地方都市である。昔から製紙業の盛んな街であり、今日も多くの工場が立ち並ぶが、東海道新幹線を使えば東京へは 1 時間圏内にあり、首都圏への通勤通学が可能であることから近年はベッドタウンとしての性格も併せ持つようになってきているという。

今回お話を伺った「コロコロおはなしの会」が活動する富士市南地区は、JR 東海道線富士駅と新幹線新富士駅に近接する。もともと田畑の多い地域であったが、近年は宅地開発が急速に進行しつつある。また多くの工場群を擁し、県営・市営住宅等の建設もあり人口の流入が多くなっているとされる。少子化の中にあって地域の小学校(富士市立南小学校)や中学校(富士市立富士南中学校)も市内で屈指の大規模校である。また市内における当地域の出生率は最も高くなっているという。にもかかわらず南地区には児童館や図書館が設置されていないため、地域のコミュニティセンターとして公民館が果たす役割はきわめて大きくなっている。

このような南地区の富士南公民館で、子育てをめぐる孤立しがちな母親に対して支援の手を差し伸べようと活動しているボランティアサークルが「コロコロおはなしの会」(以下「おはなしの会」)である。私たちは 2006 年 9 月 26 日、南公民館に「おはなしの会」代表の加藤さん、望月さん、肥後さんを訪ね、どのような目的でサークルを立ち上げ、その経緯はどのようなものであったのか、どのような運営を行いどのような活動をしているのか、お話を伺った。以下、この時にいただいた資料からの情報もあわせながら活動を紹介していこう。

### 1. 活動のきっかけ

南地区の主任児童委員でもある望月さんは、主任児童委員の活動の一環として地域の中の子育て支援に取り組んでいた。2002 年からは南公民館から予算を獲得し、子育て支援講座を年 4 回開講していた。冒頭に触れたとおり、南地区は図書館も児童館も設置されていない地域であるうえに、富士市の中心部からも離れていて市街地にある児童館にも通いにくいという立地である。そのような状況の中で、望月さんは南公民館を核として地域の親子が集う場所を作りたい、子育てに関する母親の相談にのりたいと活動をしていた。

一方、現在「おはなしの会」の代表を務める加藤さんは、「富士市子どもの本を学ぶ連絡会」に所属し、小学校での読み聞かせ活動や地域における文庫活動などに参加していた。その関わりで富士市から「ブックスタートふじ」の手伝いを依頼された。2004 年のことである。ブックスタート事業は生後 6 ヶ月の乳児とその母親を対象に絵本の読み聞かせの説明や絵本の紹介、絵本のプレゼントを行う事業であり、保健福祉センターでの 6 ヶ月検診の時に 1 度だけ行われるものであった。その活動の手伝いをするうちに、せっかく良い本を紹介できるのだから、その延長として各地域の公民館を使って母親方に本を通じたサポートを試みよう、という動きが持ち上がった。

望月さんと加藤さんは以前からの顔見知りで、互いにどのような活動をしているのかを知っていた。そこで、本をきっかけとしたつながりを元として、親子が集まれる場所を作ろうと設立されたのが「おはなしの会」であった。「おはなしの会」というサークル名にしてはいるもの

の、本の読み聞かせだけに限らず、手遊びや歌も加え、活動を充実させてきた。また当初は 6 ヶ月児だけを対象としてきたが、活動を続けるうちに、子どもの成長に合わせた対応が不可欠となり、現在は 6 ヶ月対象クラスと 1 歳～2 歳児以上のクラスの 2 クラスに分けて活動をしている。サークルの活動は加藤さんをはじめとする 6 名のスタッフを核として進められている。

## 2. 井戸端会議を理想として

子育て中の親は毎日「うちの子は少し言葉が遅いんじゃないかしら」といった心配事や「こんな時にどんな叱り方をすればいいのかしら」などの疑問に直面しながら日々を暮らしている。そのような時、子育て経験のある先輩ママに「これでも大丈夫かしら」と相談できたらどれほど助かるだろうか。あるいは誰かに「大丈夫？」と一言声をかけてもらえるだけでどれだけ心強く感じるだろうか。必要なモノや知識・情報はすぐに手に入る時代になったにもかかわらず、なぜか、いやそれ故に子育て中の母親は周囲から孤立してしまうケースが多い。そして様々な疑問やストレスを抱えながら悩み苦しんでいる母親もまた多い。「おはなしの会」はそのような母親たちの「井戸端会議」となることを目指している。

かつての母親は普段の何気ない世間話の中で「うちの子供はどうだった」とか「この前こんなことがあった」という会話を交わしながら、他の母親の子育ての様子を知ること、「うちの子だけじゃない」という安心感を得ていたという。そうした環境が子育てをする上でとても大事であったと望月さんは自らの体験を回想する。

それとは対照的に、今日では個々の家庭の状況が外から見えにくくなっており、子育てをしている母親はとても孤独ではないかと、肥後さんは次のように指摘している。

「昔は布オムツを使っていたので外に干すんです。それで、あそこの家には小さな子どもがいるって分かったんです。今はみんな紙オムツになってしまった。確かお腹の大きい母親がいたはずだけど...と置いていても外から様子が分からなくなってしまったんです」。

同様に南小学校で学童保育の指導員もされている加藤さんは、「今は一人っ子がとても多く、母親たちも子育てにがんばってしまっている。がんばっている母親に伝えようと子どもたちもがんばってしまっている。結果的に日々の子育ての中で自分の子どもしか見えず、他に相談相手もおらず、何か困ったことがあると育児本などに走ってしまう」と今の親子の状況について述べていた。

このような母親に対して「ひとりでがんばらないで」というメッセージを伝えたいというのが「おはなしの会」の目的である。自分の子どもを他の子どもと比較するのではなく、他の子どもや他の母親と共感し、共有する。それらを通じて自分の子育てをもっと楽に捉えてほしい。ひとりで悩みを抱え込まないで、色々と相談して欲しい。そうした応援を続けていくことで、孤立したまま子育てに一人悩む母親をひとりでも多く助けたいと考えているのである。

肥後さんは、ある日近所のアパートから赤ん坊の泣き声がしたので、それをきっかけに思い切って泣き声のした部屋の母親を「おはなしの会」に誘ってみたという。後日その母親から「あの時、肥後さんに声をかけてもらって本当に助かりました」とお礼の言葉をいただいたという。そのような母親の声が「おはなしの会」の活動に取り組むスタッフたちの心の支えになっている。

## 3. 活動の概要

「おはなしの会」は 6 ヶ月児クラスが月 1 回、1～2 歳児クラスが月 1 回の合計月 2 回開催さ

れる。活動を始めた当初は月 1 回であった。当時、場所の確保が困難であったことやボランティア活動であることなどからそれが精一杯だったのである。しかし活動を続けていく中で、次第に子どもの年齢にあわせたクラス編成が必要となり、現在は月 2 回の開催を基本として活動している。

一回ごとの活動の流れは次のようなものである。

スタッフは毎回大体 9 時半頃に南公民館に集合し会場を設営する。参加者の親子は 9 時 45 分頃から徐々に会場に集まり始める。参加者には受付で名札を必ず書いてもらうようにしており、名札の代金として 100 円を徴収している（今後、工作を行う時の材料費などの徴収をどうするかは現在検討中）。活動は大体 10 時頃から始まる。まずは子どもたちの名前を呼んで、手遊びから始める。その後 2~3 冊の絵本の読み聞かせを行い、工作遊びなどをし、10 時 45 分頃に片づけをはじめめる。片づけが終わった時点でシーツのブランコをしたり、みんなで輪になって歌を歌うなどしてその日の活動を締めくくる。また、夏には公民館に隣接する駐車場のスペースを利用してプールなどの水遊びをするなど、季節に合わせた活動も行っている。



毎回の活動の時間的な目安は 1 時間程度にしている。まだ小さな子どもが相手なので、途中で飽きたり、眠くなったり、お腹がすいたりと様々なハプニングが起こる。したがって、歌や手遊びや読み聞かせなど様々な遊びを含め、大体 1 時間が限度という経験的な判断によるものである。また、公民館での活動を終えて、家に帰って昼食を食べるというパターンを理想としているため、10 時開始 11 時終了という流れをひとつの型にしているとのことであった。

活動内容について、開始当初は毎回活動が終わるたびに当日の活動についての反省を行い、「次はどうしようか」と相談しつつ次回の内容を決定していたという。また反省会の中で見出された課題については、2 ヶ月に 1 回程度会合を開き、話し合っているとのことであった。さらに 2006 年 4 月からは、公立保育園の園長をされていた石川さんがスタッフに加わり、会としての活動が大きく進展したという。石川さんが参加することで手遊びや工作のアイデアがとも広がった上に、「おはなしの会」の活動について年間の計画を立てて取り組むようになったのである。会として年間計画を立てることにより、次に何を準備すればよいのかあらかじめ把握できるようになり、スタッフ自身にも余裕が出てきたということであった。まさに、様々な経験を持った人が活動にかかわることによって、会としての広がりや深みが加わったことの良い例であると言えるだろう。

#### 4．規模の拡大よりも質の充実を

「おはなしの会」への参加の呼びかけは、主に地域の回覧板を通して行われている。若いお母さんたちの井戸端会議を目指し、参加者同士の交流を重視したいと考える加藤さんたちは、より多くのお母さん方に会に参加してもらいたいという願いを持っている。しかしながら、実際参加希望者が多すぎると十分な対応できないため、あまり規模の拡大は考えていないという。これは会を運営していくときの大きな悩みでもあるという。

かつて春先に回覧板を回して参加者を募ったところ、27 組 50 名以上もの親子が参加した時があり、その時は急遽 3 グループに分けて活動せざるを得なかったことがあった。参加者が多

かったため盛況ではあったが、母親たちは部屋の後ろに固まってしまい、とても参加者全員の交流が図れる雰囲気ではなかったという。また「井戸端会議」という雰囲気にも程遠かったという。望月さんらはその事態に際して「これは何か違うな」と違和感をおぼえた。そこで現在ではあまり積極的な呼びかけは行わず、口コミで参加者を募るという形にしているとのことであった。むやみに会の拡大を目指すのではなく、参加者一人ひとり、特に母親との対話と交流を大切にしたいという願いゆえである。

したがって、通常1~2歳児クラスへの参加者は大体10~15組である。また、施設の規模やスタッフの人数から考えて15組くらいを受け入れるのが精一杯ではないかと考えているとのことであった。参加者が多くスタッフが足りない場合には他の民生委員にお願いして手伝っていただくこともあるという。



南公民館 左は2階の和室 右は1階の中会議室

## 5. 生涯学習の中の子育て支援という位置づけ

「おはなしの会」の運営において心がけているのは地域との連携である。地域の親子を対象として、地域の子どもをともに育てるという趣旨で、単に他の地域活動から独立して行うのではなく、あくまでも地域の中のひとつの取り組みとしての位置づけを強く意識しながら行っているという。そのため、地域における様々な活動や行事に参加することによって日頃から顔をつなぎ、互いの活動の理解を深めていく努力を怠りなく続けている。地域の活動としての「おはなしの会」という位置づけができたことで、単なる私的な子育てサークルという意味ではなく、ある程度の公的な性格を持った活動としてステップアップできたわけである。このサークルの位置づけはきわめて重要な意味を持つ。

それは財政面においても言えることである。多くの子育て支援サークルがそうであるように、「おはなしの会」も資金不足が大きな課題となっていた。活動を開始してしばらくは会の活動にかかわるすべての費用はスタッフたちの手弁当で賄っていた。加藤さんは、「ボランティアとして行うのはとても楽しいが、内容を豊かにすることを考えた時にどうしても限界が生じる」と感じていた。そこで、会としての活動がどのような位置づけになるかと検討した時に、これは地域の子どもにかかわる事業であるから、地域における生涯学習の一環としての活動であるという位置づけを自ら確認し、また地区の生涯学習推進会<sup>1)</sup>に対しても働きかけ、了承を得たという。働きかけた努力の甲斐あって、現在年間5000円の活動費が生涯学習推進会から拠出されている。これは市からのお金ではなく地区からのお金であるという。僅かな額かもしれないが、このお金の意義は極めて重要である。

望月さんたちは「おはなしの会」の活動を公的な地域活動の中に明確に位置づけた。その結果として、生涯学習委員とのつながりを明確にし、公的な資金を得ることができるようになっ

たのである。一般的に子育て支援グループは社会福祉協議会との関わりが強いが、「おはなしの会」は社会福祉協議会と連絡を取ったことは一度もないそうである。その代わり地域の中の生涯学習の一環として活動に取り組みられている点が、「おはなしの会」の最大の特徴である。

## 6．今後に向けての課題

先にも触れた点と共通するが、「おはなしの会」が抱えている課題は、今後できるだけ多くのお母さん方に参加してもらいたいと願う一方で、一人ひとりのお母さんへの対応を考えた時に参加者数が多すぎても対応しきれないところであるという。つまり規模の拡大と質の充実という両立の難しい課題を抱えているのであるが、現在のところ、「おはなしの会」としては規模の拡大よりも質の充実を図っていきたいと考えているとのことであった。

それ故、保育園や他の子育て支援サークルが様々な活動を展開していることについても、「母親たちに様々な選択肢が提供されることは素晴らしいこと」であるから、やはりそれらのサークルも今後活発に活動をつづけて欲しいと考えている。そして様々な支援サークルや支援策が拡充していく中で、「おはなしの会」としては、一人で悩み苦しんでいるお母さんにもっと手を差し伸べていくことが必要だと考えているとのことだった。無闇に規模を拡大していく方向に走るのではなく、少人数であってもお母さん方一人ひとりとじっくり対話できるゆとりのある活動を指向し質的な充実を図りたいと考えているのである。

そして何より活動を継続させていくためには「無理をしない」ことが大事であると加藤さんは強調した。まず無理をせずに月に1、2回。どうしても都合がつかない時はお互いにやりくりしたり、休んだり。肩の力を抜いて自然体で気長に活動に取り組んでいく姿勢が長く活動を続けていく大きな要素となっている。

## おわりに

「おはなしの会」というサークル名を目にしたときは、読み聞かせに特化したサークルであろうと想像していたが、その予想は良い意味で大きく裏切られた。確かに読み聞かせを活動の中心に据えているが、それだけで完結する活動ではない。それは現代の孤独な子育てに奮闘する母親に優しく救いの手を差し伸べようとする世代を超えた地域の取り組みであった。地域の様々な経験と知識やノウハウを持った人々が自然体でつながり、そこから新たなつながりを作り出していこうとする優しい地域の力を垣間見たように感じられた。小さな取り組みであるかもしれないが、それはやがて大きく温かいつながりへと発展する可能性を秘めているだろう。

(角替弘規)

## <注>

- 1) 富士市には、24 小学校区全てに公民館が設置されており、その公民館を拠点とした地区ごとの「生涯学習推進会」がある。これはその地区の全世帯が加入した任意団体であり、地区の体育祭や文化祭等を実施している。(文部科学省 HP 「生涯学習の推進による住民主体のまちづくりに向けて」の参考資料3「教育委員会が実施している住民の社会参加事業等の実施状況一覧 8．地区活動・コミュニティ活動」

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shougai/chiiki/chousa/04082401/021/020.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/chiiki/chousa/04082401/021/020.htm))